



目次



次回展示のお知らせ	コレクション企画「雁—映画化、舞台化された名作」
名誉館長談	「森鷗外を読み始めた頃」加賀乙彦
特集	森鷗外記念館で現代アート!! 「假象の創造～カショウノソウゾウ～」
寄稿	「鷗外と現代アートのコラボレーション」倉林靖 (美術評論家)
展示報告	特別展「鷗外と画家原田直次郎～文学と美術の交響～」
活動報告	2013年9月～11月
ショップ便り	
これからの催しもの	2014年1月～3月
コラム	From 観潮楼主 No.5

展示のお知らせ

コレクション企画

雁—映画化、舞台化された名作

鷗外の小説『雁』は、明治44(1911)年から雑誌『スバル』に連載され、大正4(1915)年に初山書店から刊行された。

無縁坂に住むお玉、東京大学医学部鉄門前の下宿に住む医学生岡田、そして東大生相手に金貸しをする末造。「上野」「不忍池」「湯島天神」「神田明神」など、明治初めの本郷、湯島界隈の情景とともに、物語は語り手である「僕」の回想として語られていきます。

また、この作品は昭和から平成まで、幾度も映像化され舞台化されてきました。いず

れも、明治という時代の雰囲気や伝え、情感豊かに演出されています。

今回の展示では、所蔵品の中からこれらの映画やテレビ、舞台の台本やチラシ、ポスター、写真などを紹介します。

『雁』が刊行されて、もうすぐ100年になります。「僕」によって「読者は無用の臆測をせぬが好い。」と結ばれたこの物語は、どのようなイメージによって映像化、舞台化されてきたのでしょうか。今では巨匠と呼ばれる監督や名優たちによって生み出された『雁』の世界をお楽しみください。

期 平成25年 1月30日(木) — 2月23日(日)
場 文京区立森鷗外記念館 展示室2
開館時間 10時—18時(最終入館は17時30分)
観覧料 一般 300円(20名以上の団体: 240円)
中学生以下無料
障がい者手帳ご提示の方と同伴者1名まで無料



スチル写真「雁」(豊田四郎監督 昭和28年 大映)

スチル写真「雁」(池広一夫監督 昭和41年 大映)



『雁』 初山書店 大正4年

『雁』より 横山大観挿絵 初山書店 大正4年



『スバル』5年5号 扉発行所 大正2年5月

『雁』台本

■常設展示ミニ企画■
初山書店から刊行された鷗外作品
単行本『雁』は大正4年に初山書店から発行されました。口絵には横山大観の絵が掲載され、絹繻子の表紙は赤と青の2種類が作られるなど、凝ったものでした。初山書店から発行された鷗外作品といえは、「胡蝶本」としても珍重される『青年』や『みれん』もあります。当館所蔵の初版本の中から、初山書店から発行された鷗外作品を紹介いたします。

関連事業のお知らせ

上映会「雁」(104分・16ミリ・白黒)
昭和28年大映/監督豊田四郎/脚本成沢昌成/出演・高峰秀子・芥川比呂志ほか
日時 2月11日(火・祝) 14時
会場 文京区立森鷗外記念館二階講座室
定員 50名(事前申込制)
料金 無料
締切 2月1日(土)必着

朗読会

俳優が描く鷗外の世界「雁」ほか
朗読 中村彰男、山本郁子(文学座)
日時 2月23日(日) 14時~15時半
会場 文京区立森鷗外記念館二階講座室
定員 50名(事前申込制)
料金 500円(観覧料込・中学生以下無料)
締切 2月14日(金)必着

申込方法

往復はがき◆往信に「〇月〇日イベント」・氏名(ふりがな)・住所・電話番号を、返信用には、住所・氏名を明記の上、〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 文京区立森鷗外記念館「展示関連イベント」受付係までご応募ください。

Eメール◆件名に「〇月〇日イベント」、本文に氏名(ふりがな)・電話番号・Eメールアドレスを明記の上、
bnk-event@morigai-kinenkan.jp
にご応募ください。

*申し込みは、一通につき1名様お一人様1通まで、応募多数の場合は抽選とさせていただきます。
*ご不明な点等ございましたら、文京区立森鷗外記念館にお問い合わせください。

ギャラリートーク

当館学芸員が展示解説を行います。
2月5日、19日(いずれも水曜日)
各回14時(30分程度)
申し込み不要。展示観覧券が必要です。

名誉館長談

森鷗外を読み始めた頃

森鷗外記念館が文京区の文学施設として開館されたのは、2012年11月1日である。鷗外の150歳の記念日を偲んでの開館であった。鷗外が建てた観潮楼は惜しくも空襲で焼けてしまったが、戦後建てたレンガ色の建物には昔の面影が再現されていて、その建物は占めていくにつれて、昔そっくりになる感じであった。それを建て直して新築の、全く新しい建物にしたというので、私はちょっと心配していた。木造の観潮楼とは全く別の建造物になってしまったと思っただけだ。しかし杞憂に終わった。

コンクリートの新記念館は、いかにも鷗外らしい風格を持っていた。とくに、庭の大石が保存され、そこに鷗外が腰かけ、右に幸田露伴、更に端っこに齋藤緑雨が立っている「三人冗語の石」のあたりは、背景の大銀杏とともに昔の面影を色濃く保っていた。

私の父方祖父は金沢の前田藩の武士であった。明治維新の時、殿様の命令で、東京大学の前身の南校に進学して、殿様が上京されると、前田藩邸、のちの東京帝大のなかに住むようになった。祖父は後に前田の殿様の家扶(召使頭)になり、藩邸が東大になったあとは、新宿の前田家別邸の近くに移り越して仕事をしていった。祖父と父は西大久保の前田家のそばに住み、私もその地で育った。1970年に父と長男の私は

本郷に移り住むことにした。「人間は生まれた場所で死ぬものだ」と父が言うので、西大久保(現・歌舞伎町)を去って、丁度竣工していた今の茗岐坂のマンションに住むことにしたのだ。それ以来40年、私は文京区に住んでいる。

東大医学部を卒業してから、附属病院精神科の医師になった私は、ちょうど本郷に引っ越したところ、東大を去って上智大学文学部心理学科の教授になった。茗岐坂から水道橋まで歩き、電車で四ツ谷の大学まで通った。近くて便利であった。大学も附属病院も本郷、本郷に住んでから四ツ谷に出勤。まあ、私の生活圏というのは狭いものだ。

私が医学生になって最初に買った文学書が岩波書店編の『鷗外全集』であった。それまでに、改造社の『現代日本文学全集の「鷗外編」で、『即興詩人』や『キタ・セクスアリス』など読んでいたが、まずは医学論文をドイツ語で読んでみたくなったのだ。そして、鷗外のドイツ語の素晴らしい能力に感嘆した。ついで、初期の雅文体の小説から読み始めた。少なくとも2年間には鷗外ばかりに熱中したものだ。

『キタ・セクスアリス』のドイツ語学校が、茗岐坂にあったことを知っては、鷗外をますます好きになった。東大医学部の卒業生の親睦会として「鉄門倶楽部」というのがある。明治14年卒業の30名のなかに、森林太郎の名前が見いだせる。私は昭和28年卒業の128人のひとりである。鷗外に先輩として親しみを覚えるのは、こういう名簿を見ているときだ。



焼跡の観潮楼(昭和21年)



三人冗語の石(明治30年)



観潮楼門前(年不詳)



現在の森鷗外記念館(平成24年)



記念館開館記念式典(平成24年)



鷗外記念本郷図書館(平成14年)

「鷗外と画家原田直次郎〜文学と美術の交響〜」展レセプションにて



森鷗外記念館で現代アート!! 「假象の創造」カシヨウノウソウゾウ

会期：2013年10月23日(水)～11月24日(日)
会場：無料ゾーン(エントランスホール、カフェ、図書室ほか)

10月から11月にかけて森鷗外の「美学」への視点を現代に繋げる試みとして、美術評論家倉林靖氏のディレクションのもと館内無料エリアでの現代美術の展示、ダンスと映像と音楽によるパフォーマンス、外壁に映像を投影する空間映像インスタレーションが行われました。

10月23日から11月24日まで、二人の現代美術作家赤崎みま氏、袴田京太郎氏の作品51点をエントラス、カフェ、図書室、階段等に展示しました。



モリキネカフェ 赤崎みま

赤崎氏は、植物や場が内包する記憶やイメージをテーマに写真作品を制作している作家です。今回は、ヨーロッパや植物をモチーフにした作品に加え、当館の庭にある大銀杏の木をモチーフとした新作をカフェ、図書室、二階休憩室で展示しました。袴田氏は既存の形を解体し再構築していくことで、目に見える形の背後にあるものの存在の有様を明らかにすることを試みている彫刻家です。今回は、北海道のお土産の定番木彫りの熊10体を輪切り(1)にし、再構築して龍に見立てた作品をはじめ全7点をエントランス、階段等に展示しました。



一階エントランス 袴田京太郎



金大偉 空間インスタレーション「自然と幻視」

11月2日から4日の3日間、17時から20時まで当館の外壁を映像作家で音楽家の金大偉氏の空間インスタレーション「自然と幻視」が彩りました。日没後、水面や風にゆれる花の映像が壁面や、庭園に映し出されると、館全体が幻想的な雰囲気包まれ、道行く人々も思わず立ち止まり、静かに見入っていました。

11月2日、閉館後の地下二階の導入展示室でコンテンポラリーダンスサーの山田せつ子氏と、映像作家で音楽家の金大偉氏による「ダンスと映像と音楽によるパフォーマンス」が行われました。一階から展示室へと続く階段で踊る山田氏のライブ映像(金氏撮影)が導入展示室の壁面に投影され、やがて階段を降りきった山田氏本人の姿とライブ映像とがシンクロしていくという、迷宮のような当館の特性を活かした演出でパフォーマンスはスタートしました。



「ダンスと映像と音楽によるパフォーマンス」



二階 袴田京太郎

◎撮影：コウ写真工房

寄稿

鷗外と現代アートのコラボレーション

倉林靖(美術評論家)

今回、「假象の創造」というタイトルで、森鷗外記念館に現代アートを設置する試みの、企画を担当させていただいた。実際に展示の準備が整った空間を見てみると、自分が予想していたよりもはるかに強く、不思議な感慨が湧き起ってくるのに気づく。その感慨とは、昔の文学の持っている雰囲気、こうした現代アート作品が、いかに鮮やかに現代の感性につなげ、甦らせることができるか、ということであった。赤崎みまさんの、カフェ、図書室、そして庭の大銀杏を正面にみる二階の休憩室に設置してもらった写真作品には、そのどれにも、海を遙かに臨める邸宅に住んだ鷗外の海外へのまなざし、そして様々な植物に託された鷗外の感情が、強烈に生き返ってくるような気がした。

金大偉さんの、波や水紋、植物をモチーフにした夜の映像インスタレーションでも、鷗外の精神そのものが、夜闇のなかに妖しく揺曳するようであった。また袴田京太郎さんの、解体・再構築を伴う立体作品については、私には、はじめから短編『普請中』の、「日本はまだ普請中だ」のフレーズが思い起こされていたので、その作品の佇まいは、現在の日本の「普請中」を眺める鷗外のまなざしが一層際立たされているように見えた。



二階休憩室 赤崎みま



「自然と幻視」

いかにこの建物が鷗外の「気」が満ち溢れ、ここに関わるアーティストがいかに鷗外と正面から相対することになるのか、それをよく分かってきたのが、山田せつ子さんのダンスパフォーマンスであった。地下エントランスの鷗外の胸像の前で、繊細かつ躍動的なダンスを披露してくれた山田さんの傍らで、鷗外像はそれらの営みを静かに見つめ、受け入れ、促すように、そこに在った。こうした、過去の遺産を継承する記念館と、いま現在の感性のありかを指し示すアートの営みとの、組み合わせの重要性を改めて感じた。鷗外も、現代アートとのコラボレーションを、喜んでくれたのではないだろうか。



図書室 赤崎みま



一階・踊り場 袴田京太郎

関連講演会 鷗外と美学、その現代的可能性

11月16日、鷗外記念館で現代アート「假象の創造」カシヨウノウソウゾウのディレクションを手がけた、倉林靖氏による講演会「鷗外と美学、その現代的可能性」を開催しました。ドイツ留学中に美学と出会った鷗外が、美学をどのようにとらえ、日本に移入したのか、またそもそも美学とは何か、といったことからスタートし、現代における美学の可能性、重要性、美学と鷗外の今日的な可能性を示すひとつの試みとしての今回の企画「假象の創造」カシヨウノウソウゾウの意義、成果へと話は進んでいきました。

大変濃い内容で、参加者からは早くも続編を希望する声がかれました。



日時 2013年11月16日(土) 14時～15時半
講師 倉林靖氏(美術評論家)

展示報告

「鷗外と画家原田直次郎 〜文学と美術の交響〜」

会期：2013年9月13日(金)
11月24日(日)
会場：展示室1、2

今回の展覧会では、鷗外と原田の交流を軸に、鷗外の美術活動を紹介しました。展示資料は、二人の出会いが記された『独逸日記』から始まり、自筆ノート、書簡類、原田が表紙や挿絵を手がけた雑誌類、鷗外の逸三部作の掲載誌、美術や原田に関する鷗外の論述が掲載された雑誌や新聞、鷗外が関わった美術関連図書、原田の絵画作品まで、およそ50点を展覧しました。

今回のテーマでもある「文学と美術の交響」のクライマックスとして、第2展示室全体を原田没後10年に開催された「原田直次郎記念会」の会場に見立て、6点の絵画を中心に展示しました。加えて、原田作品に鷗外や原田をめぐる人々の「ことば」を添えたスライドを上映し、原田への賛辞を表現しました。

また、書簡類にも注目し、鷗外と原田だけでなく、二人を中心とした人々の交流を紹介しました。特に鷗外が原田に宛てた2通の書簡は、鷗外と原田の直接の交流品として関心が寄せられました。その他、品川弥二郎、近衛篤磨、岡倉天心、賀古鶴所らが鷗外や原田に宛てた書簡は、鷗外と原田を中心とした広範な交遊を示唆する資料として、興味深くご覧いただきました。

このたびの展覧会で、二人の交流が日本の近代美術にとって重要なものであったことを、再確認していただけたら幸いです。



展示関連講演会

展覧会の関連講演会として、美術と文学の分野からそれぞれ講師をお招きしました。

東京美術学校西洋画科をめぐる 原田直次郎と森鷗外の立場

日本における西洋画の影響の歴史からはじまり、鷗外と原田が活躍した当時の日本の美術界の状況、そして東京美術学校をめぐる鷗外と原田の立場まで、たっぷりとお話いただきました。

ミュンヘンで出会った原田との親交で聞きし体験したことが、鷗外が美術界で活躍する礎になったということに加えて、ミュンヘン以後のそれぞれの動向や各々が交流した人々、時代背景を知る事で、「東京美術学校」をめぐる二人の相違を確認することができました。叶えられなかった東京美術学校での共演の夢は、原田没後の遺作展を東京美術学校校内で開催することで実現します。鷗外の原田への友情を確信すると同時に、二人の出会いが運命的だったと感じ入る時間でした。



日時 10月20日(日) 14時～15時半
講師 新聞公子氏(美術史家・東京藝術大学名誉教授)

森鷗外・原田直次郎の 「ミュンヘン時代と『うたかたの記』」

逸三部作の中で、鷗外と原田のミュンヘン時代がもっとも色濃く反映されているのが、『うたかたの記』です。

登場人物のモデルとなった人々や物語の舞台となった場所についての紹介から、お話は始まりました。鷗外と原田のミュンヘン時代を体験するような心持ちの中、作品解説にきました。物語の母体となった二人の体験や経験が作品にどのように散りばめられているのか、そしてその深層を読み解くことで、この作品が単なるドキュメンタリーではなく、ドイツ文学という「芸術家小説」であることを解説していただきました。

大塚氏による「夏の風の中を馬車で疾走するシーン」の朗読は、会場全体がまるで疾走する馬車を目撃しているかのような緊張感に包まれました。



日時 11月23日(土) 14時～15時半
講師 大塚美保氏(聖心女子大学教授)

活動報告

2013年9月～11月

2013年 9月	
1日	14時～16時半 「五人の歌人による公開歌会」
29日	14時～16時半 「歌に親しむ」

2013年 10月	
16日	14時～15時半 「トールペイントでブックカバーをつくろう！」
19日	14時～15時半 「東京美術学校西洋画科をめぐる原田直次郎と森鷗外の立場」
20日	14時～15時半 「新開公子」

2013年 11月	
1日	10時～18時 開館1周年記念行事 観覧料無料サービス
2日	19時～20時半 「ダンスと映像と音楽によるパフォーマンス」
23日	14時～15時半 「森鷗外・原田直次郎のミュンヘン時代と『うたかたの記』」
30日	13時半～15時 「アイロンビーズでクリスマスオーナメントを作ろう」

五人の歌人による公開歌会

9月1日、内山晶太氏、大野道夫氏、服部真里子氏、花山周子氏、東直子氏を迎えて「五人の歌人による公開歌会」を講義室で行いました。事前に提出していた「題詠・銀」自由詠、鷗外の短歌への返歌と、当日記念館を見学しながら即詠一首を加えて歌会に臨みました。東直子氏の進行により、作者がわからない状態で互選をし、得票の多い歌から講評していきました。ほぼすべての歌に対して全員が批評を求められましたが、歌人の皆さん動じることなく自分の歌も何食わぬ顔で批評していきました。詠み手によって歌の捉え方が違い、様々な意見が飛び交い歌会は盛り上がりました。かつて同じ場所で行われていた観潮楼歌会が、現代の歌人たちにより新・観潮楼歌会としてあらたに甦ったようでした。



日時 2013年9月1日(日) 14時～16時半
講師 (左から) 大野道夫氏、服部真里子氏、花山周子氏、内山晶太氏、東直子氏

歌に親しむ

9月29日、公開歌会を終え、今度は参加者が実際に短歌を作り、歌に親しみました。講師は前回に引き続き東直子氏。参加者には「題詠・坂」と自由詠の二首をあらかじめ提出していただき、公開歌会同様作者を伏せて互選し、講評しました。東直子氏の解説を交えながら、和やかに歌会は進みました。作品を選ぶ「選歌」、選んだ歌を読み上げる「披露」、選んだ理由を述べる「選評」と歌会は進んでいきました。一番票の入った短歌の作者には、鷗外しおりを記念品として差し上げました。終始楽しく柔らかな雰囲気、短歌を介して様々な年齢、立場の参加者が親密になれた2時間半でした。



日時 2013年9月29日(日) 14時～16時半
講師 東直子氏(歌人)

文の京ワークショップ

10月16日、講師に本間山美子氏を迎えて、トールペイントでブックカバーを作りました。ゲンゲの花をモチーフにして、色合いや手法で少しずつ変化を持たせながら自分だけのオリジナルブックカバーが仕上がりました。



日時 2013年10月16日(水) 14時～15時半
講師 本間山美子氏

アイロンビーズで オーナメントを作ろう

11月30日、講師に富山加代子氏を迎えて、アイロンビーズでクリスマスオーナメントを作りました。細かい作業に、大人も子どもも楽しんで取り組みました。出来上がったオーナメントは、当館カフェのモミの木をクリスマスまで彩りました。



日時 2013年11月30日(土) 14時～15時半
講師 富山加代子氏

ショップ便り

11月24日まで開催していた「鷗外と画家原田直次郎〜文学と美術の交響〜」展に伴い、鷗外×原田のコラボレーションがポストカードになりました！かわいいキューピッドがあしらわれた訳詩集「於母影」の表紙絵と、登場人物(小林土官)が鷗外に似せて描かれた「文づかひ」挿絵の2点です。お土産や特別なメッセージを贈る際にお使いください。



表紙絵と、登場人物(小林土官)が鷗外に似せて描かれた「文づかひ」挿絵の2点です。お土産や特別なメッセージを贈る際にお使いください。



次回展示のお知らせ	コレクション企画「雁—映画化、舞台化された名作」
名誉館長談	「森鷗外を読み始めた頃」加賀乙彦
特集	森鷗外記念館で現代アート!! 「假象の創造～カショウノソウゾウ～」
寄稿	「鷗外と現代アートのコラボレーション」倉林靖(美術評論家)
展示報告	特別展「鷗外と画家原田直次郎～文学と美術の交響～」
活動報告	2013年9月～11月
ショップ便り	
これからの催しもの	2014年1月～3月
コラム	From 観潮楼主 No.5

目次

(講師敬称略)

<p>1月19日 11:00～16:30</p> <p>鷗外誕生日記念行事◎</p> <p>当日カフェにてドリンクを注文された方にお菓子を1個プレゼントします。</p>	<p>1月25日 13:30～15:00</p> <p>親子プログラム</p> <p>俳句カードをつくってみよう</p> <p>講師:佐藤文香(俳人)</p>	<p>1月26日 14:00～16:00</p> <p>鷗外誕生日記念対談</p> <p>「鷗外と脚気」</p> <p>講師:森千里(千葉大学医学部教授・予防医学センター長) 加賀乙彦(文京区立森鷗外記念館名誉館長)</p>
<p>2月1日 14:00～16:00</p> <p>文の京ワークショップ</p> <p>カリグラフィー講座 初級編</p> <p>講師:池谷めぐみ(カリグラファー・MAKIKOオフィス)</p>	<p>2月8日 18:00～19:30</p> <p>朗読会</p> <p>短歌を聴く at モリキネカフェ</p> <p>講師:東直子(歌人)</p>	<p>2月11日 14:00～</p> <p>コレクション展関連企画</p> <p>上映会「雁」</p>
<p>2月23日 14:00～15:30</p> <p>朗読会</p> <p>俳優が描く鷗外の世界</p> <p>—『雁』ほか</p> <p>朗読:中村彰男・山本郁子(文学座)</p>	<p>3月9日 14:00～16:00</p> <p>文の京ワークショップ</p> <p>朗読体験『棧橋』を読む</p> <p>講師:内木明子(朗読家・相模女子大学非常勤講師)</p>	<p>3月30日 13:00～15:00</p> <p>親子プログラム</p> <p>演劇ワークショップ</p> <p>「鷗外先生」で遊んでみよう</p> <p>講師:石橋志保・洪雄大(俳優・中野成樹+フランクンス)</p>

これからの催しもの
2014年1月～3月

催しは◎以外は全て事前申込制です。各申込締切日(※)必着でお申込み下さい。申込詳細は、チラシやHPをご覧ください。どうか、当館までお問い合わせ下さい。(応募多数の場合抽選とさせていただきます。)

From 観潮楼主 No.5

小山内(岡田)八千代筆 鷗外宛賀状
明治39年1月13日付

鷗外への賀状

当館には鷗外への賀状が80葉あまり收藏されています。差出人は多岐にわたり、鷗外の多彩な活躍がうかがえます。

明治39年1月12日、鷗外は日露戦争より観潮楼に帰還しました。翌13日、小山内八千代(小山内薫の妹・小説家)からの賀状が届きます。それは、「螢の光」の原詩として知られる「Aud lang syne(久しき昔)」に祝辞と日付が書き入れられたもので、無事に帰った鷗外との再会と新年の喜びを祝う詩情あふれる一葉でした。

賀状の文面や意匠は、差出人の個性や心境をあらわし、当時の世相や社会情勢をも映し出しています。

平成26年1月26日まで展示室2にて開催のコレクション企画「鷗外への賀状」では、文人からの賀状、平成26年の干支・午年にちなんだ賀状を中心に展示し、あわせて鷗外と差出人の交流を示す資料も紹介しました。

賀状のご鑑賞とともに、鷗外と文人たちとの交流や、明治・大正時代の歳時にも想いを馳せていただければと思います。



【交通案内】

- 電車をご利用の場合
 - ・東京メトロ千代田線「千駄木」駅1番出口徒歩5分
 - ・東京メトロ南北線「本駒込」駅1番出口徒歩10分
 - ・都営三田線「白山」駅A3番出口徒歩15分
- バスをご利用の場合
 - ・都バス草63番系統「千駄木一丁目」下車徒歩1分
 - ・都バス上58番系統「団子坂下」下車徒歩5分
 - ・B-くる千駄木・駒込ルート「18特別養護老人ホーム千駄木の郷」下車徒歩5分

※一般の駐車場がございませんので、公共交通機関をご利用ください

og Ro At
文京区立 森鷗外記念館
Mori Ogai Memorial Museum

〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 TEL: 03-3824-5511
URL: <http://moriogai-kinenkan.jp>

開館時間 10:00～18:00(最終入館は17:30)
休館日 毎月第4火曜日(祝日の場合は開館し、翌日休館)、年末年始(12月29日～1月3日)、及び展示替期間等